

論文の和文要旨

論文題目	複合動詞「～こむ」の意味体系 ——中国語との対照的視点から
氏名	張 志凌

日本語の複合動詞は複雑な意味を持っている。日本語学習者にとってこの複合動詞の意味の複雑さは習得を困難にする原因となっている。複合動詞の中でも、「～こむ」は用例数が最も多く、使用頻度が高いため、複合動詞の代表的なものであると言える。これまで「～こむ」については、日本語教育と第二言語習得、語構成などの立場から、研究が行われてきたが、「～こむ」の意味体系の記述は十分にし尽くされているとは言えず、内省に基づいて議論しているものが多い。本稿は国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と北京大学中国語言研究中心が構築した『中日対訳コーパス』を利用し、収集した「～こむ」の用例を用いて、中国語との対照的視点から「～こむ」の意味を研究する。また、日本語教育の視点から「～こむ」に対応する中国語表現の体系を整理し、中国語を母語とする日本語学習者にとって、「～こむ」が習得困難である原因を探る。本稿は下記の三点を中心として議論を進める。

まず、中国語との対照的視点からみると、「～こむ」に対応する中国語の表現は「内部移動」を表す方向補語<～進>に限らず、「付着」を表す<～上>などでも表現されるという現象が目される。姫野(1999)などの研究においては、内部移動と付着を区別せずに、同一レベルとして扱われている。しかし、中国語との対照的視点から見れば、中国語では内部移動が方向補語<～進>で、付着は<～上>で表現されることが多く、明らかに別のグループをなしている。これを手掛かりとし、「～こむ」における内部移動の意味概念を研究する。

次に、「～こむ」には「しっかり/深く」のような副詞的な意味がある点に注目する。特に「入りこむ」のような、V1が内部移動を含意する複合動詞の場合、内部移動の意味概念の研究だけでは、「～こむ」の意味を解釈できない。また、「連れこむ」のような複合動詞は、後続する文に「殺害する/監禁する」などの犯罪と関わる動詞が多く表れるということから「～こむ」に被害性が含意されていると捉えられる。これらの現象は「～こむ」の副詞的な意味に繋がっている。しかし、この点について従来の研究は、内省に基づいて議論され

ているものが多く、各々の意味が生じる原因、意味の間の相関性について考察が行われておらず、意味体系の整理がなされていない。

さらに、管見の限りでは、複合動詞は日本語学習者にとって習得が困難であるという事実が観察されているにも関わらず、母語との対照的研究から習得困難の原因を研究する試みはほとんど見られない。しかし、習得困難の原因を明らかにすることにより、「～こむ」の意味研究に貢献できると思われる。本稿では「～こむ」に対応する中国語の表現の意味を体系的に整理し、中国語を母語とする日本語学習者にとって、「～こむ」が習得困難である原因を探る。

以上の三点を中心に議論を進めるが、各章の研究内容及び結論は以下のとおりである。

第一章では複合動詞「～こむ」に関する先行研究を概観し、本稿の立場を明確にする。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して収集した複合動詞「～こむ」の用例を分析する。先行研究では、姫野(1999)と松田(2004)を取り上げる。姫野(1999)では日本語教育の立場から、「～こむ」を「内部移動」と「程度進行」の二つのタイプに分類されている。内部移動は、主体あるいは対象がある領域の中へ移動することを表し、程度進行は動作・作用の程度が進行することを表す。松田(2004)は「～こむ」を、二格を伴うタイプとしてAタイプとBタイプに、二格を伴わないタイプとしてCタイプとDタイプの計4つのタイプに分類している。また、AタイプのV1(前項動詞)は内部移動を含意しないが、BタイプのV1は内部移動を含意する。Cタイプは「V1に示される状態への変化と固着」を表し、Dタイプは「V1の反復行為により生じる状態変化」を表す。V1が内部移動を含意する場合、「～こむ」は意味拡張が発生し、多義性が生じ、ほかの複合動詞と区別して考察する必要があるため、松田(2004)の分類基準は重要である。しかし、松田(2004)は内部移動の判断基準については議論していない。このため、いくつかの基準を提示し、二格を伴う「～こむ」の再分類を試みる。この再分類により、V1が固着を含意する非典型的な移動動詞、姿勢動詞、作成動詞の場合はほかの複合動詞と性質が異なり、個別に考察する必要があるということがわかる。中国語との対照的視点から観察すると、この三種類の複合動詞は中国語の内部移動表現<～进>で表現することが難しいという事実が明らかになる。このため、「～こむ」の再分類は、「～こむ」の意味研究および中国語との相違点の把握に役立つ。なお本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から収集した「～こむ」(異なり語数223語、64361例)を言語資料として研究を行う。

第二章では、「～こむ」における内部移動の意味概念の特徴について考察を行う。V1が移動の様態・手段・付帯状況を表し、V2が内部移動を表す「～こむ」は数多くあるが、経路位置関係を包入する動詞と付帯変化を表す動詞が「～こむ」と結合する例も多い。これらの動詞との結合により、複合動詞「～こむ」は、<内部への移動→存在→固着>という意味的連続体をなす。さらに、「～こむ」だけでなく、単純動詞「入る」も内部移動から結果物の存在・固着まで表現できる。一方、「～こむ」は移動を表さない作成動詞と姿勢動詞と心理・生理を表す動詞とも結合できる。姿勢動詞などは状態変化を表すが、日本語では、

本稿が提案する内向移動として捉えられる。さらに、量や価格の減少、情緒の低落を表す「～こむ」は、抽象的な内向移動として捉えられる。

第三章では「～こむ」の副詞的意味について議論を行う。姫野(1999)は「～こむ」の四つのニュアンス、即ち、「深入り感」「固定感」「抵抗感」「目的性」を提示している。松田(2004)はV1が内部移動を含意する場合、固定感が焦点化され、「しっかり」「奥深く」の意味が生じると議論している。しかしこれらの研究では「～こむ」の多義性捉えるには不十分であると思われる。本稿においては、先行研究を踏まえて「評価」の枠組みを利用し、「～こむ」の副詞的意味を「深部移動」「固定感」「目的性」「密集感」「多量性」「異質性」の六項目に分けて考察する。この六項目のうち「異質性」は価値づけ的評価を表すが、ほかは資格づけ的評価を表す。「異質性」の考察により、一部の「～こむ」は敬意表現と共起できない現象が合理的に説明される。

第四章では、『中日対訳コーパス』を利用して「～こむ」の用例を収集した上で、「～こむ」に対応する中国語の表現の全体像を描き出す。中国語では移動を表す場合、方向補語が用いられる。データの観察により、「～こむ」を表現するには、内部移動を表す方向補語<～進>のほかに、<～上/下/到>も使われることがわかる。さらに、前項動詞が作成動詞と姿勢動詞の場合は、付着と存在を表す<～在/有/着>が現れる。

第五章では、「～こむ」を表す<～進/上/下/到/在/有/着>の意味領域がどのように重なっているのかについて考察を行う。<～進>と「～こむ」は内部移動を表す点では同じだが、「～こむ」は意味拡張が行われ、状態変化を表す動詞とも結びつきやすいのに対して、<～進>はこのような動詞と結合する例はほとんど観察できなかった。一方、<～上>は「～こむ」と同様に、<移動→付着→目的の達成>という意味拡張のプロセスが存在する。さらに、<～下>は下方向への移動から、下方向への姿勢変化、作成まで表現できるので、「～こむ」を表現する例は多く観察できる。<～進>は着点の内部空間を強く要求するが、<～在>は着点の空間的性質を指定しない。前項動詞が姿勢動詞と作成動詞の場合、着点が物体の表面になるため、<～進>の代わりに、<～在>が用いられる。また、受け身文の場合、<～有/着>表現が用いられる。

第六章では「～こむ」の副詞的意味が中国語ではどのように、どの程度表現できるかについて考察を行う。考察により、複合動詞<沉/深+ V>、<V+着+補足説明>、動補構造<V 得～>などの表現形式があることがわかる。また、「～こむ」は深部移動と固定感と目的性と異質性・被害性を含意する文脈を指定するが、この文脈指定機能を有する中国語表現はほとんど見られないと言える。中国語を母語とする日本語学習者にとって、「～こむ」の習得が困難であることは上記の現象に起因すると考えられる。

第七章では上記六章を総括し、結論を示す。